

コラム

福和 伸夫

濃尾地震は、地震工学を学ぶ私たちにとって、原点となる地震であるが、その実態は余りにも知られていない。私自身も、名古屋で育ったにも関わらず、小中学校で学んだ記憶はない。濃尾地震のことを最初に知ったのは大学での専門教育の中であった。たしか、多賀直恒先生の講義だったと思う。記憶にあるのは、特別天然記念物の美鳥の断層崖の話や震災予防調査会の設立についてである。濃尾地震の実態を知ったのは、ずいぶん後で、平成6年に名古屋で開催された建築学会のときである。それまで地震工学を学んで15年間、濃尾地震のことを知らずに耐震設計に携わっていたとは、今にして思えば恥ずかしい限りである。地盤震動の分野では建築大会前日に地域交流会を催すことが慣例になっている。この時は、今岡克也先生（現豊田高専）と一緒に世話役をし、岐阜で研究会を企画することにした。交流会前後に、根尾谷の断層観察と長良川の鶉飼いを体験してもらうためである。私にとって何れも初体験であった。ずいぶん沢山の方が参加くださった。その際に、岐阜大名誉教授の村松先生から根尾の現地を案内頂いた。断層観察館のトレンチで目の前にした鋭利な刃物で切ったような断層のズレは衝撃的であった。神戸より一回りスケールの大きい大震災の体験を後世に伝える必要を痛感した。以後、現地を訪れる機会も増えた。近くにある淡墨桜見物、鶉飼いとセットにした断層見学は、地震工学を学ぶ知人を案内するには絶好のスポットである。最近では、濃尾地震の教訓を広げるなどと理由をつけて、自然と鮎を堪能している。

